

董慈堂經部

二

33



前曉晴翁撰  
松川半山畫

全部五冊

# 蕪段堂雜錄

攝都書肆

五書房合梓

平成十九年  
二月二十三日  
京都府医学振興会  
寄贈

京都府立医科大学  
10001481307

## 緒言

夫學做詩學做賦學詠和歌而  
雖欲成名於天下非由此而識  
字由此而明義由此而知聖賢  
之道可至此道難焉先哲皆以  
明經為最末文學也宜哉蓋此

異魚之圖

天明四年の冬下総國小堀と  
 布川の間に河岸の魁  
 細くかろ所の異魚を魚名  
 許る代  
 魚の形状五角ナリク腹斯の  
 背黒くさかのう星高く出  
 大粒なり惣長七尺五寸余  
 周廻く五尺余口提燈の  
 盈細ありく口さる釘  
 むの有長サ五六寸  
 赤く番椒のく腹白  
 腹の釘のくももの



北二本釘の本

丸と空りり恰也

金具は彷彿なり

腹と板

塩漬とん

丸四斗樽

満うると云

○撰播の海辺に生筆草らなり初春より青葉と生ど其葉細長  
 録は細くはさなり小なる葉の長さ七寸大の二尺三寸もなり大宛菅葉の如

食火鷄 一名地鷄 蘭語云カスワ 此鳥又俗名駝鳥 然其食火鷄  
 與駝鳥別 寬政元年西七月阿蘭陀船より寄り長崎より來り同二年  
 戊五月より浪華ふ松く觀物と此食火鷄ハ西南の天世より出る奇鳥なり  
 常ハ米麥とくしひ悴る時ハ缺石瓦火炭とく喰ひ其俗糞不出れ尤  
 鳥より大鳥あり大鳥ハ大便二穴有り鳴き地より雷の如く物毛逆立ち  
 かも夏より冬より後形狀凡土佐駒の如く身の重き拾八貫目有り  
 餌飼一日は握飯一升五合余食ひたり

食火鷄之圖

毛黒レ長キ呀凡ニ尺許



本草綱目卷之二十一